



TITLE:

湯川先生・基研・物性:ある私的な
湯川先生追悼の記

AUTHOR(S):

松原, 武生

CITATION:

松原, 武生. 湯川先生・基研・物性:ある私的な湯川先生追悼の記. 物性
研究 1981, 37(2): 75-76

ISSUE DATE:

1981-11-20

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/90400>

RIGHT:

湯川先生・基研・物性

— ある私的な湯川先生追悼の記 —

松 原 武 生

昭和28年～29年、湯川記念館から基礎物理学研究所へ、そして物性部門が基研にできてその人事が動き出した頃、私は遠く札幌の地にいて、京都の情報をほとんど知ることができなかった。最初の基研研究部員になり、仙台の学会の際に集って物性部門の教授人事について相談したことがあったのをぼんやり記憶しているが、それも自分には他人事のような人事問題であった。だから、小谷正雄先生が、わざわざ札幌まで来られたときにも、私は逆に京都へ移る決心がつかず、確答することができなかった。そんな私に基研物性部門の初代教授を引受ける決心をさせたのは、湯川先生から頂いた直筆のあたたかいお手紙であった。

基研に来て見ると、既に早川・木庭両スーパーマン教授が先任で居られ、てきぱきと万事を運んでおられたから、私の出る幕は余りなかった。何かあると湯川先生が「物性の方は……」と尋ねられ、それに自分の意見を言えば大体事は足りた。だから若い素粒子の助手は私を基研の陪食教授とからかったが、私は陪食教授で満足であった。

湯川先生が物性部門に何かと気を配っておられたことは、折にふれよくわかった。最初に助教授のポストが基研にきたときも、それを物性部門に廻して、教授1、助教授1、助手1のチームをまず物性から作らさせられたのも湯川先生である。湯川先生は物性関係の基研談話会によく顔を出されて、何かと質問されていた。

湯川先生と私の交渉は決して深くはなかったけれど、忘れられない幾つかの思い出がある。私が基研在任中のある時期に、他の教授は全部外国へ出張していて、教授は私一人になったことがある。そのときいろいろと湯川先生から御相談を受けたのを思い出す。基研の建物がそろそろ狭くなって、増築要求を考える頃であったが、先生のお伴をして、基研の建物の内外を隅々なく見て廻ったこともあった。また最初の組織助手の試験と面接を湯川先生と一緒にやったものである。その先生が病に倒れられ、急に私が研究部員会議の議長を所長の代りにつとめる破目になったとき、先生は心配されて、一々会議の様子を報告させておられたということを後になって人から聞いた（この時を機会に、基研の研究部員会議は研究部員が互選した議長団によって議事を進める現在のような方式に変わった）。

キエフで高エネルギー物理学の国際会議が開かれたとき、湯川先生をはじめ素粒子関係の教授は全員ソ連へ出かけて、短い期間ではあったが、私は所長代理を命ぜられた。留守中大した

松原武生

ことは別に起こらず、会計検査院の役人が来て、所長代理として応対したことぐらいが主な出来事であったが、湯川先生が無事帰国されて日も余りたたぬある日、私は所長室に呼ばれた。先生は私に「君は何か面白い仕事をしたらしいが」と質問してこられたので、簡単に量子統計力学で使えるダイアグラム展開や、グリーン関数法について説明申し上げたら、うなづいておられた先生は「あのめったに人を賞めない Landau 先生が君の仕事を大変賞めていたよ。これから非常に重要になるだろうと言ってね」と自分のことのように喜んで下さっている様子であった。私はあのときの湯川先生のやさしい笑顔をどうしても忘れることはできない。

私の基研の任期が終りに近づいたとき、口には出されなかったけれど湯川先生は心配して下さったらしい。京大の物理教室にポストを作るための大変な尽力をして下さった様子で、ふだん出席されなかった人事委員会や教授会にも出席されて、私のために一言述べて頂いたということを後で聞いて、大層恐縮する思いであった。ちょうどその頃かと思うが、J. Blatt が京都に来ていて、私をオーストラリアの N. S. W. 大学に引抜くべく運動していたが、遂にある日、私を連れて Blatt は湯川先生の部屋へ直談判しに行ったことがある。まくしたてる Blatt の言葉を聞いておられた先生は、思いなしか不機嫌そうで、結局はっきりと返事はされずに終わった。しかし京大物理教室の話が難行して、遂に私はオーストラリアへ移住することを決意し、湯川先生に推薦状を書いて下さるようお願いしたとき、先生は何もおっしゃらずに唯うなづいて承知して下さっただけであった。この話はオーストラリア政府が私にビザを出ししぶった為に宙に浮き、結局流れてしまった。こんなことがあったので、5年の任期をちょうど終えて、基研から物理教室へ移る送別会の席上で、湯川先生から頂いた思いやりのこもったお言葉がいつまでも私の心に残った。

物理教室に移ってからは、湯川先生にお会いできる主な機会はプロGRESSの編集会議であった。唯一度今でも不思議に思うのは、私が教室の運営委員長をしていたとき、その委員会に湯川先生が顔を見せられたことである。偶然見えたのかも知れないが、私には無能な委員長ぶりを心配して、先生が見に来られたように思えて、しばらく気になった。

今はもうないが、七夕の頃物理教室の南館屋上の旧会議室を舞台にして、毎年一夜華やいだパーティが開かれていた。ある年湯川先生も招待されて出席されていた。私は都合で出席できなかったが、代りに秘書嬢が面白半分に出席して、たまたま湯川先生と同席したとのことである。そのとき湯川先生は少しアルコールを召しておられたと想像するが、彼女が私の秘書であることを聞いて、先生は「帰ったら松原君に伝えよ」と彼女に伝言された。そのお言葉はここに書くことははばかれるが、私の終生忘れ得ぬものである。その中で「たまには話をしに来るように」と伝言されたことは、とうとう私は実行できなかった。湯川先生の御期待を裏切ってしまったように思えて、今も大きな悔が私の胸深く残っている。